

留学生相談における言語的課題

——「内的枠」と「まもり」という視点から——

興津 葵¹

【要約】

留学生を対象にカウンセリングを行う際の課題の一つとして言語的課題が挙げられる。また留学生にとって感情表現が難しいこと、カウンセラーにとっても留学生の抱える課題を把握する難しさや不安につながりやすいことが明らかになっている。言語的課題の背景を理解し、留学生相談においてどのような視点が必要か考えることは意義があることだと思われる。本稿では留学生相談における言語的課題について、「内的枠」と「まもり」という視点から検討を行う。

【キーワード】

留学生相談、言語的課題、内的枠、まもり

1 はじめに

大学に留学する留学生のほとんどは日本語、もしくは英語を勉強し、日本での留学生活に臨む。学業上の日本語力や英語力が高くても、こころのことを語る場合「理由は分からないけど悲しい」「どうして不安か分からない」というような訴えを聞くことがある。そのような訴えに対し理解を深めるため、その背景についてカウンセラーとして必要な視点に着目して検討したい。

2 留学生相談における言語的課題

井上（1997）は留学生を対象にカウンセリングを行う際の課題として、言語的課題、文化差の課題、発達の課題の三つの課題を挙げている。そのうちの言語的課題について、「留学生は日本語を始めて間もないときには、カルチャー・ショックに加え、感情的表現が上手くできないことや、抽象的表現が十分にできないために自尊感情が傷ついたり、自己評価が低くなり強いストレス状態であることが多い」こと、また「そのこと自体をカウンセラーに正確に伝えられなくて、問題を共有しにくい」（井上、1997）と述べている。しかし、このような悩みは日本語を学び始めて間もない留学生だけでなく、日本語をある程度話せる留学生でも直面することだと思われる。日本語が話せる場合でも、留学生本人が感じている違和感を表現することは難しく、カウンセラーは留学生が感じている違和感について理解が難しい場合がある。また感情表現が上手くできないこと、抽象表現が十分にできず、本人が抱えている問題自体をカウンセラーに伝える困難については、英語や日本語などを第二言語として話す留学生にも起こりうる悩みであると思われる。

また留学生相談における言語的課題はカウンセラー側の課題もある。大西（2016）は学生相談従事者における留学生対応時の専門家としての準備性、対応可能性の認識について調査を行い報告している。その調査では、「留学生対応時の戸惑いや不安（5件法）」に関しては、回答者51名中29名（56.9%）が、少しある（＝

¹ 学生総合支援機構・学生相談部門・特定専門業務職員

4), たくさんある (= 5) と回答し, またその場合の具体的内容は双方の言語力不足に起因する意思疎通に関する不安が最も多く, その他の内容としては文化差に起因するコミュニケーションの齟齬への不安, アセスメントの困難, 危機対応の難しさ等が挙げられたと報告している (大西, 2016)。

これらの研究から, 留学生にとっても感情表現の難しさがあり, またカウンセラーにとっても, 言語面による不安が大きいということが分かる。

3 言語化が難しいもの

留学生相談は母国語以外の言葉で相談する必要がある場合も多く, 相談する学生は感情表現が難しい場合があることが明らかになっている。しかし言語力の問題だけでなく, 言語化すること自体が難しいこともある。

まず学生が相談したいと思うこと, 心の準備ができていないということが必要になる。緊急の状況で相談が必要となる場合もあるが, 多くは家族や友人以外の第三者に相談しようと思い自ら申し込み, 相談に来所するプロセスが必要となることが多い。心理相談においては特に, 学生にとって相談の場が安心できること, 学生とカウンセラーの関係性で話せる内容が変わってくるであろう。

カウンセリングにくる学生にとって, 学生自身が言語化が難しいことの例として外傷性記憶や離人感がある。安 (2020) は外傷性記憶とはトラウマ体験の記憶であるとし, 七つの性質を述べている。第一に外傷性記憶は全体的な記憶ではなく, 断片的, 要素的なものが多いこと, 第二に外傷性記憶は非言語的であり, 言葉に表すことはとても難しいとしている。第三に外傷性記憶には悲しみや怒りなど, 否定的な感情がつきまとうこと, 第四に否定的な考え (それは自己に対する否定的な考えや時に「死にたい」「無力だ」という考えなど) が結びついているとしている。また第五に外傷性記憶は他の記憶とは分離され, 異物のような記憶として記憶されていること, 第六に侵襲性として, 外傷性記憶は自己と関係がないところで想起され, 思い出したくない場合でも意識の中に侵入してくることが挙げられている。そして第七に外傷性記憶は島状に分離された記憶でありながら, 時に他の外傷性記憶とリンクしてしまうことがあり, 嫌なこと一つがあると「芋づる式に」色々な嫌なことが出てくることを挙げている。これらのことから, 外傷記憶はその性質としては大変なものがある一方, 言語化が難しいこと, 言語化することについてはクライアントの状態により慎重な姿勢が必要であると思われる。

また名取 (1998) は離人症について「実感の無さ, および, 実感のなさに対する苦しみを中核とする離人症状が慢性化する事態」とし, 言葉で表現することは極めて難しいとしている。また「治療者がこのような体験になじみがない場合, 言葉で離人感覚を訴えられても, なかなか実感がもてない」こと, 「治療者は, ともすれば, 離人的な世界にいる人を現実的な世界に引っ張りだしてあげたいという欲望を抱きがちである。しかし, 内的な変化が十分進展して, 現実的, 実感的な生身の世界, 生身の時間への再突入に本人が耐えられるようになるまで, じっと待たねばならない」(名取, 1998) と述べ, 離人症が言語化すること自体や, その理解が難しいこと, その背景を理解する必要性を述べている。

このような言語化が難しいことについて, 専門的に支援するために「見立て」が必要であろう。そして大学の留学生相談において, カウンセラーは多言語による表現や理解の難しさという視点だけでなく, まず学生のニーズを把握すること, 時に症状として言語化が難しいことも含め, それを踏まえた上で病態水準の把握や, 学生が日常生活をおくりながらどのように話を聞き, 会っていけるのかなどの視点が必要だと思われる。

4 留学生相談における「内的枠」と「まもり」

留学生相談の特徴として時に日本語以外の言語で対応すること、また来談する学生が多文化背景をもっているという点が挙げられる。留学生相談では来日後の問題のみならず、母国にいたころからの課題について語られることも少なくない。それは母国ではカウンセリングを受けることが難しい場合や、環境的にカウンセリングを受ける場所が身近にないなどの理由も考えられるが、家族から離れ、日本の大学に留学し初めて相談できるという学生も多いと思われる。それは外的要因のみならず、内的要因もあるのではないか。

心理援助をする上で「時間」や「場所」はカウンセリングにおける「まもり」として設定されている。山中（2002）は心理療法における「まもり」について箱庭療法の「枠」や描画における「枠づけ」に言及し、『『枠』は『自由』と同時に『保護』を与え、同時に、みえないかたちで『制限』をしている』と述べている。留学生相談における内的な枠について考えた際、時に母国語以外の言葉で語ることが「内的枠」として作用することが考えられないだろうか。長岡・古谷（2019）は大学の授業において「自らの主体を関与させる体験」として、遊び（人生ゲーム）を「ある役割を演ずる」という枠組みの下で行った。その結果遊びにおける「役」は創造的なワークを成立させる「内的枠」として作用したと論じている。留学生にとって、留学先では母国語とは違う言語や日本語を使い、日本社会の中で生活するということは、母国の自分とは違う「新たな自分」としての一面をつくり、語るための「自由」を得る一方、言語表現による難しさという「制限」もあるように思われる。石山（2012）は多文化間カウンセリングの前提の中の一つに、多文化社会において、相談が行われる「場」とそこで関与し合うカウンセラーと来談者には複数の文化が幾層にも重なり合い拮抗し合っていること、またそこには複雑なダイナミズムが存在していることを挙げてている。カウンセラーは自分自身の文化や価値観を意識しながら、クライアントの文化や価値観の理解に努め、治療やカウンセリングの場において二人の「言葉」や「場」を作っていくことが求められるのではないだろうか。

また「場」に関連しそこにいる「からだ」ということも無視できない要因である。仁里（2006）は相談室はクライアントの感じている状況がその空間に映し出されてくること、セラピストはクライアントの居場所となるところを提供し、二人でクライアント自身のことを十分に考えていける場所に作り変えていくには、セラピスト自身の無意識的なこころの働きによるとしている。また仁里（2006）は、言葉や行動はほとんど意識的に発せられたものであり、生身に近い本能的な緊張感や不安感は弱められたり排除したりすることは難しく、心理臨床ではお互いの感じている感覚の在り方とそれに伴って生じる空間自体を意識することが必要だと述べ、そうして身体的な「身体」と心理的な意味合いが付加された「からだ」（臨床心理学において多く問題となってくるもの）が重なりあっていくとしている。そして、カウンセラーは自分自身が感じる体感を明確にし、さらには他者をも感じる感覚を磨いていくことが必要であると述べている。「からだ」というのはカウンセラー自身、またクライアントを理解する上での指標として、「内的枠」となるのではないだろうか。例えばクライアント自身の「からだ」のイメージの変化や、カウンセラーの体感から理解を深めることは重要である。また言葉では聞いているつもりでも体調が悪くなる場合はクライアントの大変さを理解できていない分、「からだ」がうけとった可能性や、クライアントがカウンセリングの過程で風邪などを引く場合も、無意識的な部分から変化が起こっている可能性、また「からだ」が「枠」となり休息が必要であることを示し「まもり」となっている可能性も考えられる。

5 終わりに

留学生相談における言語的課題について、その背景を含め「内的枠」、「まもり」という視点に着目して考

察した。留学生相談において言語力や、多文化への理解に努めることは重要であると思われる。その上で、二人の共通の「言葉」や「場」をつくっていくことを通し、クライアントの本当に聞いて欲しいことを汲み取っていくこと、クライアントを理解する努力を続けていくことが求められるのではないだろうか。

【文献】

- 安克昌. [新增補版] 心の傷を癒すということ——大災害と心のケア. 中央精版印刷, 2020.
- 井上孝代 (編著). 留学生の発達援助——不適應の実態と対応——. 多賀出版, 1997.
- 石山一舟. 第13章 グローバル化と多文化カウンセリング 多文化的理解と支援のありかた. 学生相談 必携 GUIDEBOOK 大学と協働して学生を支援する. 金剛出版, 2012, 190-217.
- 長岡由紀子・古谷学. 遊びにおける「役割」が「内的な枠」として作用することの意義——ボードゲームにおける偶発性と流れに着目して——. 常葉大学健康プロデュース学部雑誌, 2019, 13巻, 1号, 57-64.
- 名取琢自. 4.4 離人症の心理臨床. 心理臨床の実際 第5巻 境界例・重症例の心理臨床. 金子書房, 1998, 117-128.
- 仁里文美. 臨床心理学から見たからだ. 金城学院大学論集 人文科学編, 2006, 3巻, 1号, 31-37.
- 大西晶子. キャンパスの国際課と留学生相談: 多様性に対応した学生支援サービスの構築. 初版, 東京大学出版会, 2016.
- 山中康裕. 山中康裕著作集3 たましいと癒し 心理臨床の探求1. 岩崎学術出版社, 2002.

【謝辞】

留学生相談室・「きずな」アドバイジングのスタッフの皆様, 学生総合支援機構スタッフの皆様に感謝申し上げます。